

## 論文

## 不安 — 生をゆるがすもの

佐藤 俊一\*

不安は常に私たちの身近にあるが、多くの人たちは避けるものとみなしている。なぜなら、不安になることで自分自身のあり様がゆらぐからである。そのため、不安は否定的条件として語られることになる。また、恐怖と異なり、対象化することができない。

他方で、不安は私たちにとって、極めて人間的体験である。一つの極限状態として体験することで、私たちは決断し、生の覚醒の機会となる。ただし、そのためには人間を善と悪という具合に単純二分化して理解するのではなく、私たちが、人間存在の条件そのものに根ざす矛盾をいかに生きるかにかかっている。

上記の課題を見据えながら、本稿では不安の概念を再検討し、不安が生の可能性を生み出すものであることを示していく。同時に、常に安定した生があるのではなく、生きるとは暗黒の世界への誘惑にどのような態度を取れるかにかかっていることを明らかにする。

キーワード：暗黒の世界、人間的体験、生の覚醒、不安の二重性、没対象性

## はじめに

初めてのことを試みる時、私たちは不安を抱く。たとえば、学生のAさんは自分の進路について、これまで親の言うとおりにしてきたが、今回は初めて自分で考えて決定したいと思っている。親の言うとおりにしていれば、頼るものがあって安心だったが、一人で行動するために不安になっている。

私は、長いこと教員をしているが、未だに4月の新学期の授業準備をしていると不安になる。担当する科目が変わることがあったとしても、基本的に授業をするということは、同じことである。しかし、授業の準備をしていると、去年はどんな始め方をしたのだろうか、今年はどうな学生が受講しているのだろうか、私の講義を聴いてくれるだろうか、やはり第一回目前は不安な気持ちになる。

---

\* 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

こうやって私たちの行動を振り返ってみると、初めてのことに取り組むときだけでなく、同じことをしていても不安になることがわかる。一つには、日々の生活が単調な繰り返しに見えながら、一回・一回は異なり、同じことはないことを示しているからだろう。それゆえに、何回行ったことでも、今回はどうなのかと不安になる。どんなに経験を積んでも、つきまってくる。さらに、多くの人が体験しているだろうが、今、この瞬間までとても落ち着いていたのに、昨日のできごとを思い出したら急に不安になることがある。気になり出すと簡単に治まらない。このように考えると、不安の体験とは、私たちが避けることを願うだけでなく、まるで不安を求めているかのようにも思える<sup>1)</sup>。表現としては矛盾するのだが、不安がないと不安になるのである。それ程、不安は私たちの生とともにある。

前記のように不安は常に私たちの身近にあるのだが、多くの場合に否定的な条件として語られる。不安を避けることの意義や方法が氾濫しており、正面から向き合うことを勧められることは極めて少ない。そのため本稿では、生をゆるがす不安が私たちに問いかけているものを改めて明らかにしてみたい。また、その取り組みを通して、従来の問題解決型では対応できない課題に対するアプローチと、こうしたテーマが問いかける現代的意味を確認していきたい。

## 1. 不安の再発見

### (1) 生の基本にある不安

日本の経済成長の右肩上がりが終わり、自分の収入や公的年金の今後についてなど、見通しの立たないが増えている。平均寿命が世界の上位にあっても、自分の健康については誰もが心配している。もし、何らかの障がいや要介護状態になったら、また癌と診断されたらどうしたらいいのだろうか。できることを予め準備しても、私たちの生活は、未来のことを考えると不安になる。

上記のようなことは、多くの人々に共通する面もあるが、実際には個々人で受けとめ方が異なる。ある人たちは、予防的手段を講じることで安心しようとしている。たとえば、私的な年金に加入し、貯蓄をする。人間ドックで身体の管理を行い、食事にも栄養面で気を使い適度なスポーツを行っている。趣味やボランティア活動にも自主的に参加し、人との触れ合いを大切に孤独を感じていないし、忘れている。もちろん、不安を感じることは極めて少ないだろう。

他方で、癌になって余命が数か月と宣告されている人がいる。残された日々をどのように生きたらいいのか。家族が気遣ってくれるのはわかるのだが、うっとうしくも感じている。一日一日をどうやって過ごしたらいいのか、気持ちばかりが焦って何もできない不安の中にいる。また、妻に先立たれたある男性は、昼間でも孤独を感じ、毎夜、これから自分はどう生きたらいいかを考えて不安な気持ちになる。

両者の状況を比較してみると、前者の人たちは不安を感じていないように見え、後者の人たちは不安の渦中にいることがわかる。しかし、まったく別の次元にいるように見えて、共通する面がある。前者の人たちに注目すれば、自身の生を予防することで、できるだけ安全なものにしようとしている。しかし、危険が迫れば不安になることは容易に予測できるし、そのために日ごろから気をつけている。つまり、今あるかないかは別として、不安を前提としていることは同じである。

ここで注意しなければならないのは、現代人はどうしてこんなにも不安を恐れ、逃れたいと思っているかという点である。その際に、何に恐れているのか、それを明確にできない。つまり、(S. Kierkegaard = 1966 : 239)「無であるところの何ものかに対して不安になっている」のである。予め予測できれば、リスト化して準備化できる。また、類似した体験である恐怖のように具体的な対象として示すことができない。対象として明らかにできれば取り除くための方策を考えることができる。したがって、この「対象化できないこと (没対象性)<sup>2)</sup>」が、不安の厄介な面である。と同時に、なぜ対象化できないのかということ問いかけてみる必要がある。

## (2) 不安は私自身の表れ

恐怖には対象があることを指摘したが、同時に恐れ of 具体的な対象は私たちの外にある。したがって、対象化しやすい。同様に、不安を予防する人にとっては、不安は自分たちの外にあり、襲われないように気をつけていると思っているかもしれない。ところが、不安は私たちの外にあるのではなく、内にある、より正確に言えば、私たちのあり様の根幹にかかわっていることが特徴的なことなのである。そのため、自分の外側にどんな社会的鎧を身につけ、また健康に対する予防的手段をとり、たくさんの経験を積んで学んだとしても、完全に避けられるものではないことがわかる。はじめにでも示したように、私たちは元々、不安な存在だということがわかって。反対に、そうした道具が役に立たないとわかる時、「人間としてのわたしが生き残っており、人間としてのわたしが存在していることから生じる反応」(谷口 1975 : 181) が不安なのである。したがって、不安は私の外にあるのではなく、私そのものであることだとわかる。

このように不安とは、私の外にある対象から脅かされることではなく、私というものが無くなる、確認できなくなるという私自身の反応なのである。問題となるのは私を脅かす対象なのではなく、私のあり様なのである。このことに関して、谷口隆之助は「不安はわたしを非存在へと脅かす何ものかに対する反応ではなく、それはわたしが非存在へと脅かされているというそのわたし自身から立ちのぼる反応であり、そのわたし自身の状態を表出する反応である」(谷口 1962 : 181) と指摘する。そのため、不安は私たちの生をゆるがすものであるが、不安のなかで私たちは自分に出会い、自分が何者かがわかる。

多くの人たちは、不安を無くしてしまいたいと考えるが、不安を無くすとは自分を発見する機会を失うことになることがわかって。反対に、不安と直面することで私たちの生き方が問われ、

その都度の自身の生きざまをハッキリさせることができる。そのため不安は、私たちが脅かすものではあるが、同時に生を確かなものにしてくれることがわかる。それは、私たちが可能性を求めている存在あり、不安になることでそれが実行できることを知っているからなのである。ここに多くの人たちが忘れて「不安の再発見」がある。

### (3) 私という存在

私が存在しなくなることの究極的なことは死であるが、死が迫ると不安は最も高まることになる。反対に、私たちは日々の生活において自分が無くなるとは多くの人が思っておらず、「ある」ものであり、「続く」ものとみなしている。その拠り所としているのが、自分以外の権威あるものである。したがって、自分ではなく、自分以外のものを讃えるという「偶像崇拜」をすることによって自分を維持しているのである。ここでいう偶像とは神だけではなく、私たちが創り出した思想、モノなど、すべてのことである。

こうした現代人の生きる態度を、フロム (E. Fromm = 1977) は「持つ存在様式 (have)」として批判する。たとえば、「自分には家やお金がある」、あるいは「家族として夫や子ども、職場には信頼してくれる部下がいる」ということで、そうした人やモノを持っていることで安心できるという考えである。生きるために必要な物や自分にとって大切な人を失いたくない、手離したくないという願望は、気がつく対象を偶像化し、その対象に縛られ、支配されることになる。したがって、「さまざまな持つ対象ではなく、私たちの人間としての態度全体」(Fromm = 1977 : 97) が問われているのだが、そのことに気づけない。そのため、フロムは「私は偶像が物であるがゆえにそれを持つことができるが、私がそれに屈服することによって、同時にそれが私を持つことになる」(Fromm = 1977 : 112-113) と警鐘するのである。こうした状態とは、まさしく人間が疎外されていることになる。つまり、私自身ではなく、私が創り出したものを私だと勘違いし、それを崇拜しているのである。

上記のような持つ様式に対して、フロムは「ある存在様式 (being)」を提唱する。具体的には、「持つことは、何かを使えば減るものに基づいているが、あることは実践によって成長する」(Fromm = 1977 : 154) ことができる。モノは使えば減るし、やがて壊れる。しかし、私たちは自分を使うことで成長し、自分になることができる。さらに快樂と喜びの違いについて、「喜びは瞬間的な忘我の火ではない。喜びはあることに伴う輝きである。」(Fromm = 1977 : 162) と指摘する。私たちは、自分自身になっていくというプロセスにおいて喜びを体験しているのである。

このように確認していくと、フロムが指摘する「ある存在様式」とは、beingと示されているが、同時にbecomingであるともいうことができることがわかる。つまり、「ある」に留まるのではなく、「なる」という存在様式である。ところが、「ある」や「なる」の存在様式においては、確かなものを自分の外側にも持つことも、見ることもできない。そのため、どこまで行っても不

安はなくなる。しかし、その不安の中で課題に直面し、決断することで私たちは自身の生を確信することができる。不安は避けられるものとしてだけでなく、人間存在に積極的な意味をもたらすものであり、日常の現実を超えること、すなわちスピリチュアリティ（生の覚醒）を生み出す体験として位置づけることができよう。

## 2. 極限状況における生の覚醒—不安の二重性

### (1) 不安に潰される生

これまで不安が避けられるものとして語られるとき、それは危険の徴候であり、疾患やその症状として扱われることが多かった。代表的な研究として、フロイト (S. Freud) は制止と症状とを区分し、両者が不安と関係すると示し、さらに「制止は、機能に対して特別の関連を持つもので、必ずしも病的なものを意味するわけではないが、症状は、ある病的な過程の徴候というほどの意味を持つ」(S. Freud = 2010 : 11) ことになると指摘する。恐怖症や強迫神経症の事例検証を通して、不安は危険状況に対する反応であり、自我はその状況を逃れるための行動をとること。そして、「症状は不安の増長を避けるために作り出されるのだ、とも言えようが、しかしこれでは深い洞察にはならない。症状は、不安の増長によって注意喚起の信号を送られる危険状況を避けるために作り出される」(S. Freud = 2010 : 56) ことになる。

たとえば、幻聴の症状が続く人は、幻聴が聞こえることで自身の不安を抑えることができる。逆に、幻聴が無くなってしまうと危険状況を避けるための信号が無くなり、自身の安定を保つことができなくなってしまう。このように、病む人の世界を理解していくとき、症状を取り除くことだけを目指せばよいのではなく、なぜ、その症状が表れている、あるいは本人にとって必要なのかを洞察することである。さらにフロイトによれば、「不安を一時的に宙づりにしておくことを学んでいる自我はそこから逃れ、次いで症状形成によって不安を縛り付けておこうと試みる」(Freud = 2010 : 69) ことになる。このように自分を保つという作業は、裏側にある不安とどうやって同居していったらいいのかという戦いである。そこには、完全な勝利はない。なぜなら、不安は誰にとっても生きている限り無くならないからである。できることは、いかにバランスを取って不安を押さえ付けておくかであり、不安を病む人はすべての生きる力をそこに注いでいる。

このように疾患の症状として表れる不安は、私たちの生を潰していくのだが、そこから簡単に逃れることができない。反対に、もがけばもがく程、深みにはまっていくといった方がよいだろう。その究極は、自分が無くなるということへの不安である。他方で、避けられない不安は自分を生み出すチャンスともなる。そこでは、私たちが何かにしがみ付くのではなく、自由に生きることへチャレンジしている。自分が自由になるとき、不安を避けて通ることができない。以下では、生を深める不安について検討してみよう。

## (2) 生きるとは生まれ続けること

私たちは、親から生を授かったときだけが生まれるときなのではなく、絶えず生まれ続けることができる。ただし、誰もができることではなく、あくまで可能性としてである。先に示したような症状として表れる病理としての不安ではなく、フロイトが制止としてとりあげたような不安は誰の生活の中にもあり、その表れ方は一人ひとりによって異なる。そうした不安を単に否定的なこととして排除するのではなく、むしろ積極的に捉えることで私たちの生が深まることが起こる。ただし、一歩踏み出すときは、支えてくれるものがなく一人で行わなければならない。そのため不安になるのだが、どんなに経験を積んでも逃れることはできない。不安を避けようとするならば、何もしないことである。私たちは同じ時と場に留まっていれば、安定している。しかし、それでは生きていても死んでいると同じになる。生きようとすれば、その度に不安を体験することになり、そこから生まれ続けることが可能になる。

このことに関連して、対人援助専門職を対象としたグループスーパービジョンに参加していた臨床心理士が自身の面接における態度を次のように語ってくれたことが興味深い。

初回、初めてのときはわからないがあたりまえ、したがって専門職としても不安がない。しかし、2回目、3回目となるとそれまでの面接からクライアントのことがわかっており、それらを踏まえた対応が求められ、適切な対応ができていないか慎重にならざるを得ない。したがって、2回目、3回目の時の方が難しく感じる。このグループ研修も2回目を迎えており、不安だった。そんなとき心がけているのは、片足を前回にわかったことへ突っ込んでおいて、今の面接を行っているということだった。

一回性において問われるのは、何回目であろうが、〈今・ここで〉の一回を自由に自分らしく生きられるかである。用心のために片足を過去に突っ込むのとは反対に、フロムが指摘するように「安全のために内側に支えにしている杖を外して内から外へ出て行く」(Fromm = 1986 : 150) ことをすることである。そうすると、単独で自分自身が相手と向き合い、相手のところへ行くことができる。この一回性に懸けられることが、相手を、そして自分を大切にすることになる。この何ものにも頼らないという決断が、相手を、そして自分を大切にすることになるのだが、その動きを行うときにまさしく不安の中にいる。

彼が気にしているのは、回数を積み重ねていくと、それまでにわかったことがあり、それに基づいて対応ができていないかということである。わかっていることを利用したいと思い過去を振り返るときに不安も感じているので、確かなものにするために片足を過去に突っ込んでいる。したがって、関心は〈今・ここで〉でよりも過去の実績をどのように使うかにあるのだが、不安を感じながらも過去の体験に自分の行動の安全の保証を求めている。

現在のことに不安で、自分の対応がもたらすクライアントとの関係の未来について、過去に頼ることで自分を支えようとしていることがわかってしまう。こうした態度とは、時間軸の中で物事を考えていることの表れである。反対に、「現在とは瞬間であり、永遠的なものである」(S. Kierkegaard = 1966 : 288) とキルケゴールが指摘するように、時間軸では測れないものである。瞬間が過去や未来を持たない現在のことであり、「この点こそ(私たちの)感性的な生の不完全さがある(括弧内佐藤)」(Kierkegaard = 1966 : 288) ことになる。そして、「永遠とは、やはり過去や未来を持たないのだが、それが永遠的なものの完全さ」(Kierkegaard = 1966 : 290) なのである。したがって瞬間を生きることで不安が生まれるのだが、同時に動物にはない精神が始まることになる。そして、精神として成長するためには、私たちは、常に生をゆるがす不安とともに生きることになるのである。

### (3) 生の覚醒

これまで不安を疾患や症状とみなすものと、生を生みだすものとしての二つの側面を示してきた。こうした二重性とは、一般論として語るだけではなく、一人ひとりの生きる中に表れる。ある人が不安によって病むことになることもあるだろうし、不安と向き合うことで生を覚醒することも起こる。どちらになるかは、私たちの生きる態度によって変わってくる。そして、一生の間で問われ続けることになる。

私が私自身になることを、「実存開明<sup>3)</sup>」という方法で問いかけたのが実存哲学者ヤスパース(K. Jaspers)である。具体的には、実存が対象として捉えることができないこと、同時にいわゆる客観的な理解ができないという特徴がある。なぜなら、「私はもはや合理的に洞察されない飛躍を通して、対象的に知られうるものの限界を超え出ようとする」からである。そして、この飛躍こそ、実存開明の始まりであり、「実存は哲学することの目標ではなく、むしろ哲学することの根源なのである」(K. Jaspers = 1964 : 8) と主張する。

では、その飛躍とは実際にはどのような状況から生まれるのであろうか。それを可能にするのが「限界状況」であり、「われわれが衝きあたり挫折する壁のごときもの」(K. Jaspers = 1964 : 233) としている。具体的には、「死・苦悩・闘争」を取り上げている。これらのことを克服することに意義があるのではなく、「全然別の能動性、すなわちわれわれの内なる可能的実存の生成、によるのである。つまり眼を見開いて限界状況へ踏入ることによって、われわれは、われわれ自身となる」(Jaspers = 1964 : 233) のだと断言する。ヤスパースの言う限界状況とは、本論の中で示してきた生きることの否定的な条件を表している。さらにより身近に感じられる「孤独・不安・別れ」などをあげることができよう。これらの体験は、人間的体験であるのだが、そのもつ性格がゆえに科学的に理解して取り組もうとすれば、避けられ、取りくめない対象とされてしまう。また、そうした状況にある人たちへ科学的にアプローチすることの限界がわかる。反対に、

スピリチュアリティ（生の覚醒）を求める私たちにとっては、実存開明のチャンスであり、人間の可能性を生み出すための機会なのである。

以上のことは、効用性や一般化を求める科学的価値とは相容れない面を示していることがわかる。個別価値にかかわるテーマなのである<sup>4)</sup>。今日の生の課題を見ていくと、これまでの科学的価値に基づいた問題解決型のアプローチや目標達成型の行動では取り組めないことが噴出している。生きる意味を見出せない中での自死、さらに病気や障がいによって社会から不必要と烙印を押される人たちがいる。こうした人たちは、皮肉なことに先に示した人間的体験が置かれている状況がゆえに身近にある。したがって、実存開明の機会があり、生を覚醒させることが可能なのである。人が自分になるということは、簡単なことではないが、誰もが可能性としては有している。それを切り開いてくれるのが否定的条件である人間的体験をいかに生きるかにかかわっている。また、そのことが誰もが有するスピリチュアリティを目覚めさせることになる。

反対に、今の社会にしがみつき、組織から被せられた責任に対して従順に行動している人たちには、縁遠い話であろう。安全、安心だけを求める人たちには、避けたい否定的条件であるが、そうした生きる態度からは、ただ生きていることが永遠と続くだけとなる。

### 3. 暗黒の世界へ落ちるという不安

#### (1) 自由への不安

個人や社会が成長していく過程とは、自分の拠り所としていたものから離れ、自分が一人で判断し、行動できるようになることである。こどもは生まれることによって母親から離れ一人の生物学的存在になるが、その後も母親と強い絆によって一体となっている。フロムは、個人が完全に開放される以前の絆を「第一次的絆」(Fromm = 1966 : 34-35)と呼んでいる。個々の成長の過程とは、この第一次的な絆を断ち切ることから始まる。個性化と自我の成長が進むと同時に、安定した絆が無くなったことにより孤独や不安が増すことになる。このとき、孤独や不安に対してどのような態度をとるのか、人によって異なる。ある人たちは自分が一人になること、束縛から解放されて自由になることを止め、かつての第一次的な絆を求めて外界に服従する。自分を支えてくれるものを盲目的に求めることで、退行現象が起こるわけである。そうした結果、「生が終わらぬうちに生を否定する病気を患う人びとの、見かけだけの合理化」(Fromm = 1965 : 147)を生み出すことになる。

他方で新たなかたちで不安や孤独に向き合える人たちがいる。彼女たちは、他者や社会との関係を「愛と生産的構え<sup>5)</sup>」によって生きようとする。すなわち、開放された自由（～からの自由）に脅え、その中で不安に押しつぶされるのではなく、積極的に自由を生きること（～への自由）になる。そこでは、私と他者は異なり一体化されることはないが、お互いを信頼し、尊敬す



ることができる。すでに指摘したように、私たちは絶えず生まれ続けることができることになるのである。

このように検討することで、「人間の本性の問題に関しては、人間の本質とか本性とかは善とか悪のように特定の《実体》(substance)ではなくて、人間存在の条件そのものに根ざす《矛盾》(contradiction)であるという結論に達する」(Fromm = 1965 : 161) とフロムは指摘する。したがって、生きるとは、この矛盾をいかに生きるかにかかっていることになる。先に示した2つの方向性があるのだが、第一次的絆への逆戻りは、ナルシズムに基づく他者との共棲的關係をもたらす。それが自分を完成するために、他人を必要とする態度になる。「サディストは他人を自分の延長とする。マゾヒストは自分を他人の延長とする」(Fromm = 2001 : 467) のである。このようにナルシズムの人間は、他人を自分のために使うことで不安から逃れようとする。こうして自他をモノ化していくことは、生きるものを死ぬものへと変えていくことになる。フロムは、そうした生きる態度をネクロフィリアと呼び、悪の攻撃性であり、最終的には破壊すること、死を望むことになると指摘する。

こうした矛盾を生きることを避け、悩まずに生きようとするのが、まさしく今日の課題となっている。自由は私たち一人ひとりを個性的に生きることを可能としてくれるが、同時に不安がつきまとい、どのように生きるかと決断を迫ってくる。そのため、「私が何を欲してよいか知らないならば、私は涯しない可能性の前に立って途方にくれ、自らを無と感じ、自由のうちでの不安の代りに、自由に対する不安を抱く。」(Jaspers = 1964 : 213) ことになる。フロムが「自由からの逃走」と呼んだ生きる態度が、いつの間にか今日の社会に充満しており、そのことに多くの人が気づいていないことが恐ろしい。

## (2) 誰も責任をとらない社会

社会が病んでいれば、その社会に従順に生きることは、体制の中に自分の居場所を見出せていると思いながら、実は自分自身が病んでいることに気づけない。なぜなら、不健康な社会と自分が一体化しているからだ。一方で不安などの人間的体験は、一人ひとりが目覚めることを可能にすると指摘した。

フロムは一連の著作<sup>6)</sup>において、19世紀を表す生きる態度を「搾取的構え、貯蓄的構え」としている。資本主義の発展の中で、同様に、20世紀を「市場的構え」と位置づけている。資本主義の発展の過程において、人は自分の欲しいものを相手から奪い取り、多くの富を蓄えることをしてきた。さらに、市場での交換価値が大きな役割を果たし、自分の仕事に見合うお金を求め、市場価値によって人間の評価がなされることになった。もちろん、そうしたものは21世紀になっても残存している。しかし、今世紀になって社会に顕著にみられる態度が、誰も責任をとらないという生き方である。多くの人は、組織が決めたこと、上司から指示されたことをただ行うだけ

である。したがって、あるのは、社会や組織から被せられた責任に過ぎない。そして、その責任を果たすことで責任ある行動をしていると勘違いしている。そこでは、決めたのは私ではなく、組織や上司である。したがって、失敗したり、間違えても、私には責任がない。自分が応えるという責任は、当然とらない。また、このような場合に、組織や上司が責任をとろうとしないのも明白である。

筆者は、前記の社会状況を踏まえて、21世紀を「責任から逃避する態度」—社会や組織に服従する態度と呼びたい。従順な態度の人たちは、「自分が服従を強いられていると感じておらず、合理的な権威に従っているという幻想を抱く」(Fromm = 1983 : 51) ことになる。というのは、自分で見て、感じて、判断することは、ただ服従するのではなく、自分のしたいことをハッキリさせ、求めることになる。どこから、誰から出された提案や考えであっても、疑問を感じたときに表明できることである。それは、「何かに反する方向の態度ではなく、何を求める方向の態度である」ということができよう。フロムが指摘するように、「半ば眠っているゆえに減じる危険にある人々の目を開かせる責任を、進んで引き受けること」(Fromm = 1983 : 52) である。

怖いのは、社会や組織に従うこと-権威に服従することで、自分を守り、自分や組織を大事にしているとの勘違いすることである。こうした態度は、「できている、している」と思い込むことで、無関心を生みだす。たとえば、組織の達成目標が優先することで、あるタイプの職員が求められることになり、その方針に基づいて教育や研修が計画され、実施される。当然のことだが、その方針に適う職員が評価され、一定の基準を満たしているとみなされる。こうやって、ある規格化された職員ばかりになっていくと、枠にはまらないで個性的に考え、自由な発想をする職員が育たないことになる。皮肉なことに、教育を充実させようとして陥る点である。ここにも、一人ひとりが自分を開発することと組織が提供できることとの矛盾がある。組織を発展させ、安定させようとする、個人が同様に安定して仕事をできるようになること、一見すると、とても合理的なことに見える。しかし、こうやって不安を取り除くことができると思い込むことが、実は人間の開発を拒み、組織の発展を止めることになるのである。

### (3) 暗黒の世界への誘惑

歪んだ社会に忠実に生きることで恐ろしい方向へ導くことが起こる。フロムは、それが「悪」についてであり、人間だけが有する「破壊性」を生みだすと警告する。注意しなければならないのは、生まれた時から私たちが悪の志向や破壊性を有しているのではなく、社会によって作られるということである。ここには私たちは社会的存在であることを改めて確認する必要がある。社会的環境は人間の発達に大きな影響を及ぼすが、人間を作るのは、あるいは人間になるのは、一人ひとりが自分自身を創造するからである。当然のことだが、個として育っていく過程の中で、他者や社会と出会い、自分を知っていく。本稿のなかで確認してきたことは、人間が元々、「善か

悪か、愛か憎悪でもなく、矛盾することを生きる」(Fromm = 1965 : 162) のだが、予め決まっていなことは、常に私たちが不安にさせる。したがって、不安や孤独に潰されしまう人たちは、自分を維持し、守ることを優先する。他者や社会は、そのための手段であり、無関心となり、モノとして扱うことに疑問を感じないことになる。

その一つの例が、津久井やまゆり園での殺傷事件の植松聖被告に対する見方である。事件が報道された後に、彼の行動は「優生思想」に基づくものであるという風潮が作りだされたが、果たしてそうだろうか。もちろん、優生思想そのものを正しく理解する必要があるが、多くの場合に劣っている遺伝子を排除すること、そこから「劣った人間は生きる価値がない」と捉えられている。ところが、ここで注意して検討したいことがある。たとえば、「コミュニケーションがとれない」「意思疎通ができない」「奇妙なふるまいをする」人たちに対して、多くの人が怖い、あるいは関わりたくない、傍にいて欲しくないと感じたことがあるだろう。相手が誰であろうと先入観なしにフラットに出会えればいいのだが、私たち凡人にはできない。自分も植松被告と同じものを抱えているとわかると、不安になる。したがって、こんな危険な思想を持っている人間が存在するのだということが社会にショックを与えたのではなく、誰もがその可能性を有していることが不安にさせているのである。

被告が「優生思想を持っている」で済ませる人は、自分とは無関係な異常な人が持つ考えだとしている。これこそ、本稿で示した「持つ存在様式」に自身が染まっていることに気づいていない表れである。そうした意味において「障害者は生きていても意味がないという」という植松被告の発言を捉えて、優生思想という烙印を押し自分とは異なることを強調するのである<sup>7)</sup>。

暗黒の世界は誰にもあり、暗闇のなかで迷うことはいつ起こっても不思議ではない。そのため私たちは不安になり、安易に安心を求めてしまう。しかし、精神の健康とは、この不安とともに生きることである。そのため大切なことは、私たちは永遠に未完であることを確信することである。未完であることは、不安をもたらす。しかし、不安の中で、緊張した関係で行動することで〈今〉を大切にできる。人生が未完結ということが、私たちの〈今〉の生きざまを問いかけているのだ。

## 注

- 1) キルケゴールは、不安はひとつの共感的反応であり、またひとつの反共感的反応であるとし、不安をおそれつつもなおそれを愛し、その不安のなかに溺れたのだ、と指摘する。S. Kierkegaard (1844) BEGREBET ANGEST, København (= 1966, 田淵義三郎訳, 『不安の概念』中央公論社, 239-240)
- 2) 下記の論文の「不安についての補足」において、不安は期待と見逃しえぬ関係にあり、不安には不確定性と没対象性という特徴が付き随う、と示されている。

S. Freud (1926) *Hemmung, Symptom, und Angst*, GESAMMELTE WERKE Volume 1-17 NACHTRAGSBAND ZUR AUFFASSUNG DER APHASIEN, 1972 (=2010加藤敏他訳, 「制止, 症状, 不安」『フロイト全集19 1925-28』, 岩波書店, 198)

- 3) ヤスパーズの主著である3巻構成の『哲学』第2巻のタイトルでもある「実存開明」とは、一人ひとりが自己喪失から抜け出て、自己の本来性へと立ち返り、そのつど一回限りの状況の中で、真の自己自身として生きることを目覚めさせる実存への呼びかけである。中山剛史「ヤスパーズ『哲学』を読む—〈呼びかけ〉に耳を傾けること」K. Jaspers, (1932) *Philosophie* (=2011小倉志祥・林田新二・渡辺二郎訳『哲学』中央公論新社, 9-10)
- 4) 効用価値と個別価値の詳しい内容については、下記の文献を参照されたい。

Macmurray, J. (1946) *The Structure of Religious Experience*, Yale University Press, New Haven Connecticut (=1965谷口隆之助訳『人間関係の構造と宗教』誠信書房)

- 5) 生産的構えとは、第一次的な絆から解放された人間が、自由がもたらす孤独と不安の中で健康に生きるための基本的な態度を指している。それはあらゆる領域の人間の体験に見られる、関係のしかたのことである。また、愛とは、責任と注意と尊敬と知識の意味を含んでおり、他の人間を成長させ発展させたいという希望を含んでいる。

E. Fromm (1947) *MAN FOR HIMSELF*, Holt Rinehart and Winston (=1972改訳, 谷口隆之助・早坂泰次郎訳『人間における自由』東京創元社, 109, 137)

- 6) こうした生きる態度を先に示した生産的な構えとは反対のものとして、フロムは、パーソナリティの非生産的構えとして位置づけている。詳しくは、『自由からの逃走』『人間における自由』『正気の社会』などを参照されたい。
- 7) だれもが価値がある、さもなければだれもが価値がない。

Michael Connelly (2011) *The Drop* (=2016古沢嘉通訳『転落の街』講談社文庫.)

## 文 献

S. Freud (1926) *Hemmung, Symptom, und Angst*, GESAMMELTE WERKE Volume 1-17 NACHTRAGSBAND ZUR AUFFASSUNG DER APHASIEN, 1972 (=2010加藤敏他訳, 「制止, 症状, 不安」『フロイト全集19 1925-28』, 岩波書店.)

谷口隆之助 (1975) 「不安—実存体験としての不安」早坂泰次郎他編『職場青年の心理学—青年よ不安をいだけ』有斐閣.

E. Fromm (1941) *ESCAPE FROM FREEDOM*, : Holt, Rinehart and Winston New York (=1966新版, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)

—— (1947) *MAN FOR HIMSELF*, Holt Rinehart and Winston (=1972改訳, 谷口隆之助・早坂泰次郎訳『人間における自由』東京創元社.)

- (1956) THE SANE SOCIETY, Holt Rinehart & Company, New York (= 1958, 加藤正明・佐瀬隆夫訳『正気の社会』社会思想社.)
- (1964) THE HEART OF MAN: Its Genius for Good and Evil, Harper& Row, (= 1965鈴木重吉訳『悪について』紀伊国屋書店.)
- (1973) THE ANATOMY OF HUMAN DETRUCTIVENESS, Holt Rinehart and Winston (= 2001復刻版, 作田啓一・佐野哲郎訳『破壊—人間性の解剖』紀伊国屋書店.)
- (1976) TO HAVE OR TO BE, Ruth Nanda Anshen (= 1977, 佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店.)
- (1981, 82) ON DISOBEDIENCE AND OTHER ESSAYS, Liepman AG Literary Agency, Zürich (= 1983『反抗と自由』紀伊国屋書店.)
- (1983) Über die zum Leben, Deutsche Verlags-Anstalt (= 1986佐野哲郎・佐野五郎訳『人生と愛』紀伊国屋書店.)
- S. Kierkegaard (1844) BEGREBET ANGEST, København (= 1966, 田淵義三郎訳, 『不安の概念』中央公論社.)
- K. Jaspers (1932) Philosophie II —Existenzerhellung—, Springer (= 1964, 草薙正夫, 信太正三訳『実存開明 [哲学II]』創文社)
- Rollo May, (1950) The Meaning of Anxiety, THE RONALD PRESS COMPANY NEW YORK (= 1963, 小野泰博訳『不安の人間学』誠信書房.)
- 佐藤俊一 (2016) 「個々の不完全さから生まれる可能性—生を覚醒する現象学試論」淑徳大学創立50周年記念論集刊行委員会編『共生社会の創出をめざして』学文社.

## Anxiety: It's Unsettling Effect on Our Lives

Shunichi SATO

Anxiety is always with us but most people believe it is something to be avoided it as it unsettles our existence. Being in a state of anxiety is understood to be a negative condition and furthermore, in contrast to being in a state of fear, the object of anxiety cannot be clarified.

On the other hand, we feel that being in a state of anxiety is a very human experience. Through experiencing it as one of limit situation, it can have a positive aspect, enabling a person to make decisions and to be more fully awakened to life itself. However, a person cannot be understood by simply considering the two aspects, good and evil alone. A person's very existence stems from such contradictions and what the person can make of his or her life.

Bearing in mind the above issues, and after re-examining the concept of anxiety, we show that anxiety itself can bring potentialities into our lives. But at the same time, as long as we are alive, we will not only be living a stable existence but will also have to consider how we should deal with the temptations of the darker side of life.

Keywords: darker side of life, human experience, awakening of life, duality of anxiety, rejection of objectification